

## イタリアの南部と社会問題

—— パスクアーレ・ヴィッラリ「南部からの手紙」より ——

勝 田 由 美

Il Mezzogiorno e la questione sociale

—— estratto da “Lettere meridionali” di Pasquale Villari ——

KATSUTA Yumi

読者がすでに、マフィアの主たる基盤は農村にあること、その撲滅のためには、シチリア島の77%を耕作する多くの人々の状況を改善しなければならないことを、認められたとしよう。すると、即座に驚きや多大な不信が芽ばえてくるのだ。たとえばこうだ。「そのような悪は、万物に備わる時という力が解決してくれるのを待つしかない」。また、次のように強く断言する者もいる。「それではあなたは、イタリアに社会問題をひき起こすつもりか？ 我々は多くの災厄に苦しんでいるが、それはまだ経験していない。国内は平和であったのに、恐ろしい災厄を解き放とうというのか？ 満たされることのできない欲望を農民たちにかきたてるのは、まさに祖国に対する大罪となろう。彼らはきわめて数が多く、少しも礼節をわきまえない階級である。彼らが蜂起でもしたら、誰が抵抗できるだろう？」。

まず、こうしたことをよく理解しておくべきだ。この大いに普及した意見こそが、問題が真剣かつ明確に議論されることを、これまで妨げてきたのだから。「社会問題」が他国の人々をあれほどひどく悩ませているものとして理解されるなら、幸いにも、たしかに我々はそれを免れている。社会問題が発生するには、工業、農業、商業の発展がすでになされていることが不可欠であり、それは、イタリアには、とくに今話題にしている南部には、およそ存在しないものであるからだ。我々は、ナポリの職のない、極貧の人々に何らかの援助が与えられることを願うとき、彼らを労働や産業にしむけることしか考えない。農民が、地域によってはみられる奴隷状態から救い出されることを願うとき、自立へと導くことをひたすら求めている。危険思想が論じられ始めた国々には、通用しない議論である。そしてもし、こうした思想が生まれる可能性があるとして、貧しくよるべなき人々の精神的・物質的向上が放棄されねばならないとしたら、口を閉ざしていなければならない。だが、そんなことを支持す

る者がいるだろうか？ イタリアには、社会主義、共産主義、インターナショナリズムは存在せず、さしあたりはそれを恐れる必要もなく、また、たしかに社会問題は存在しないが、国内は完全に平和だろうか？ 社会の進歩がなければ政府の交替もまったく無意味な事業となってしまうのであり、社会問題を抜きに進歩するような政治問題は存在しないのだ。

ところで、南部で我々が享受している平和とは、いかなるものであろう？ カモッラやマフィアや匪賊が、秩序と平和の印だろうか？ チューリッヒ、ジュネーヴなどのスイスの多くの都市では、まさに人々は破壊的な思想に駆り立てられることもよくあるが、こうした思想が我々に広まれば、未曾有の災厄が訪れるに違いない。しかしスイスでは、昼夜を問わず、たとえ大富豪であっても生命や財産の危機を感じずに、憲兵のいない山河や森林を通行することができる。イタリアのある地域では、武器を手にした護衛に囲まれていなければ歩くことができず、自由のただなかにも奴隷と大差のない人々がいることを考えれば、スイスでは秩序が乱されており、逆に我々においては完璧に平和であると言えるかもしれない。

そして、我々は、別の面からこうした状況の害悪すべてを検討したのではないだろうか？ 蜂起は危険である。だが、怠惰、無気力、仕事もせずに自堕落になることは、とくに自由でありたいと考える人々にとっては、それに劣らぬ危険である。専制は、労働も消費も少ない社会に成立するので、怠惰や自堕落を許容しがちであり、自らの安定のためにそれを必要とすることさえある。だが、自由な民とは、労働も消費もさかんに行う人々である。もし我々が、政治革命を行うにあたって先に社会を変革していたならば、今日のような状況にはならなかったであろう。これはまさしく、政府と行政を変化させる政治革命のみを行ったからである。支出は大幅に急増したが、生産は同じペースでは増加しなかった。そのため財政赤字が生じ、これは課税によって収支を均衡させても解消の見とおしはない。わずかな欠損があれば赤字はすぐ再発するだろうし、窮余の策として数年は緊縮財政を続けても、物質的・精神的な福祉の向上を求めるなら、長期の継続は不可能だろう。だが、一方で、国内の労働と生産に増加がみられなければ、支出も圧迫されるだろう。まさに悪循環である。少しも働かないか、生産性の低い仕事に従事している愚かな階級を救いださないことには、問題は決して解決しないだろう。これは、我々にとって信義の問題であるだけでなく、まさに利益の問題なのだ。まず精神的な均衡を得なければ、真の、そして恒常的な財政的均衡を、我々は達成できないであろう。(中略)

我々は、山賊行為を撲滅するためにおびたどしい血を流したが、根本的な対応策についてはほとんど考えなかった。多くのことと同様に、緊急な鎮圧の必要性が、当分は延命するであろう悪の再発を防止しうる予防的手段を、棚上げにさせるのである。政治にかんして、我々は、手術にはたけていたが、診断はおそまつであった。メスでの切断や腫瘍の摘出は行っても、体質の改善を考えることはまれであった。新政府は、たしかに多くの学校を設置し、道路をつくり、公共事業を行った。が、農民の社会状況は、まったく研究の対象とはされず、それを直接に改善しうるような措置も講じられないままだった。それを目的に開始された措置

はただ一つしかなく、それは、教会財産の小区画への分割と売却、そして国有地の分配である。それは、南部にとって大いに利益となりうる土地所有農民階級の育成を可能にするはずのものであった。だが我々は、その詳細に立ち入らずして、現状ではその成果が期待にはほど遠いものであったことを知るだろう。実際には、それらの土地はあの手この手で大地主の広大なラティフォンドを拡張させ続けているのであり、新たな農民階級は形成されていないのだから。

さて、今や我々の問題はこうである。不当に厳しい抑圧を受け、農奴にすらなぞらえられてきたこの農民達の状況は、1860年以降、目に見えて改善されただろうか？ 焦燥感から責任転嫁をせずに、こうした問題を解決するには、しばし個々の人間の性質を一般化して、新しい状況が、人々を過去よりも強い力で善へと導くのか、それとも、悲惨な飢えた人々を、慣らされてしまった圧政にとどまるよう強いるのかを、見きわめる必要がある。忘れてならないのは、社会がある方向へ進むとき、すでに寛大で善良な人々の力では、それをとどめ、危険な歩みを阻止することはできないことだ。人々が同じ空気を吸えば、共通の利害が生じ、それは強固に持続する。これが事を起こそうとする者に味方して、不信や無知から反動化したり、専制者に同調したりして、救いの手をさしのべようとする人々に闘いを挑むこともまれではない。これが現に起きていることであり、心にとめておくがよい。

異国の人が驚きの目でみるように、南部では、人口の多い都市の多くで、ほとんどが互いに姻戚関係にある少数の大地主の家々が、貧しい農民の群れに囲まれている。ごく少数の店員や事務員を除けば、他の市民階層は存在しない。田畑は荒れ果て、そこで働く人々は都市の住人となっている。産業も、ブルジョアジーも、民衆の絶対的主人である地主を抑制する世論も、存在しない。民衆は生存を地主に頼っており、見捨てられれば生きるすべを失う。もちろん、地主にとっても農民は必要である。だが、南部のように、人口に不足なく、人手が充分にあり余っているところでは、結果はどうなるだろう？ 経済学は実に正確な説明をした。賃金は、労働の継続にかりうじて必要な最低水準に切り下げられ、産業が逃げ道を用意しなければ、農民はただちに農奴かそれ以下の状態に落ちぶれるだろう、と。だが、こうしたことは、南部農村で土地を所有する者たちの罪ではない。社会状況の避けられない帰結であり、それは、アイルランドでは、似通ってはいるものの、さらに過酷で有害な形で見られたものだ。そこでは大量の移民と極度の飢餓が、イタリアに劣らず文明と知性にほど遠い政府のもと、前代未聞のやり方で人々を死に追いやっている。南部農村でも、似たような状況が続いていた時代が想起される。さらに、階層間の敵対を制度とし、それを自らの権威と力の基礎としたブルボン王家にまで思いたれば、精神的・社会的混乱が続くのも当然であることが理解されよう。農民に発砲し、政府に対しては事態を収拾したが、根本的には憎悪をかき立てたという人たちの話をきいたこともある。誰もが記憶しているように、政府とは神と道徳の否定であると呼ばれていた。

事実が一度ならず示しているように、誠実な者、こうした状況を憎む者もいたことはたし

かである。だが、まず、人々の精神がそれによって損なわれずにはいなかったことを、誰が否定できよう。米国が身をもって示したように、奴隷制度は多くの場合、誰にもまして奴隷の主人を墮落させるものであった。彼らは、不正な支配の行使によって退廃させられたのだ。彼らが、黒人ではなく、同じ人種の人々に行使される無制限の支配を、腐敗させないはずがあったらどうか？

では、こうした状況下で南部に革命が生じたとすれば、新政府の帰結はいかなるものであったらう？ 政府は南部に対してどのような対策をとったらう？

統一政府が国にもたらした多大な恩恵は、誰も否定はしないだろう。が、それは市民のただひとつの階級にかなしてのみである。公共事業は一時的に労働力を用いたが、産業も新しいブルジョアジーも育成しはしなかった。道路は農産物価格の上昇を招いたが、農民の社会的状況を少しも変えはしなかった。町も村も昔のままで、住民の状況も関係にもまったく変わりはない。立憲政府とは、実のところブルジョアジーの王国である。ほかでもない地主階級が支配階級となり、自治体も県も慈善事業も農村部の治安もすべて彼らの手中にある。県知事をとりまく者、大臣たちをもち立てる者、そこで彼らが依存している者は誰であらう？

そして、もしその階級が行使していた支配が専制的で、またそれが、新たに歯止めがかけられるどころか強められる一方で、無制限なままであったとしたら、いかなる国や世代においてであっても、その結果はどうなるだろう？ おのずと想像できるというものだ。

地主は農民の一群から切り離されている。農民の隷属ぶりは尋常ではないが、それは、地主にはすべてが可能であるという、また、政府も裁判所も警察も地主に依存しており、地主のみが頼りにできる唯一のものであるという、昔からの思いこみによるものである。だから、農民は、地主の許可なしには何ごともなしえない。地主から事前に連絡がなければ、当局に呼び出されても出頭せず、その命令を受けても従わない。しかし、こうしたことは、愛情や尊敬から生じるのではない。農民は、未開の民が嵐や雷をあがめるのと同じような気持ちで、地主の前にひざまづくのだ。ひとたびその魔術が解ければ、彼は、凶暴な激しさに駆られ、長いあいだ押し殺してきた憎しみをもって、残酷な復讐を果たすべく立ち上がるだろう。奴隷の一群が残虐非道な群衆と化す例は、実際にあった。だから、我々は慎重になるべきだ。一身に集めつつある多大な憎悪とその精神的・社会的帰結について、よく考えるべきなのだ。こうしたことを先入観をもたずに考え、我々の話すことさえ理解できないであろう無学な者たちには届くことはないだろうが、書物や新聞で議論をするのもよい。私の経験では、私が目的を告げて情報を求めると、ほとんどの地主は不満を隠さなかったが、それでも答えてくれないことはなかったし、多くの地主は遠出をしたり、友人に手紙を出したりして、私の求める情報や資料をすべて集めてくれた。この問題には多くの者が真剣に頭を悩ませている。博愛的・人間的な精神から、あるいは、自由主義政府のもとでは古い体制は長続きせず、一瞬の急激な崩壊によって積年のツケを支払うのを待つよりは、ゆるやかな変革を講じる方が賢い忠告であるという確信をもつゆえに。(中略)

農村部の土地を耕す多くの者たち、そして都市の誇りを失った者たちの貧困への無関心は、信じられないほどだ。しかし、彼らについて考えてこそ、生産は増大し、恒常的な財政均衡が達成できる。また、我々の陸海軍を構成するのは彼らではないだろうか？ 彼らを市民とすることが、とるに足りないことだろうか？ 彼らについて語る新聞があるだろうか？ 彼らのことを取り上げる本や冊子がどれほどあるだろうか？ 我々の文学も科学も政治も、我々の経済と道徳心の未来をはらんだこの問題には等しく無関心である。悪は多くの地方に存在するが、南部では、その程度が突出している。

問題はほどなく深刻化し、すべての人に迫ってくると確信している。暴動の激発や、怠惰や無為から生じかねない社会的破局の危険を避けたいと思うなら、法的措置が必要と認められるだろう。

まもなく、いくつかの地域では、契約に基準を設け、不正かつ不利益ないかなる条件も契約上無効であると宣言することで、農業従事者を保護する必要があるに違いない。さらに、仲裁制度や特別な司法組織の設置によってこうした基準の適用を保証することも、必要となるであろう。農民を高利貸しから解放し、自営農民階級をつくりだそうとするなら、農業信用が効果的に制度化されなければならない。

同時に、口を開けば投げかけられるであろう嘲笑や不信を恐れずに、我々の傷や不名誉を明るみに出し、世論を啓蒙することも有益だろう。自由な出版と科学とは、他国においては長年こうした障害に立ち向かってきたのだから、我が国でも取り組まなければならない。社会における大いなる真実はことごとく、初めはまともに取り上げられず、やがてありそうなことに見え始め、ついには万人に明らかとなる。嘲笑をものともせず、妄想家との汚名にさらされる勇気がなければ、進歩は次々に滞り、多くの災厄が避けられないだろう。とはいえ、少しでも事態を知っていれば、すでに多くの人が、公言することにはためらいがあったとしても、改革の必要性を認めているとわかるだろう。もちろん、こうした改革は、人々が要求する前に上からなされる方がよい。政府の手で開始し、指導すべきなのだ。政治的なものではなく、無知ゆえに南部に生じた増大しつつある反感にうち勝つには、それが唯一の方法である。そしてこうした感情は、救い主たるべき政府は解放者の勇気をもたず、自由政府は抑圧された人々を踏まれるままにしているとみなす、誠実な人々や穏健自由主義者、愛国者にも支持されている。議会の支援と国家の介入がなければ、この途方もない問題を解決するに足る個人の善行や私的な活動はありえない。多くの人は、現在の政府が、社会の多数派ではないある一階級のための便宜をはかっていることを、ためらいなく認めるだろう。そして彼らは、「マフィア」や「カモッラ」と言えば、「派閥」と答えるのだ。こうした見方は、事実によって撲滅しなければならない。(中略)

さて、私が最後に返答すべき反対意見は一つだけである。それは、内心ではそう感じている人も、祖国愛(patriotismo)からそれを明言するとは限らないものだ。「幸いにも、イタリアのすべてが南部のような状況にあるのではない。南部の農民や貧民がこうした最悪の状態

にあり、教養ある人々がこうした事態に対応も改善もせずにその義務を果たさないなら、事態はさらに悪化し、南部は半未開にとどまるだろう。イタリアの北部や中部では、現在と同じく開化された状態が続くだろう。」これまでに指摘してきた問題が、イタリアの北部や中部にもあることには触れずにおこう。この善良なる敵対者が主張するように、イタリアが分断されていることは、さしあたりはその是非を論じることのできない仮定としては、認めよう。だが、そこから彼らがたどりつこうとする結論をひき出そうとするなら、ブルボン王家が築きあげた専制の城が残っているうちに、我々に考えさせるべきであった。イタリアの統一後は、陸海軍においても、司法や行政においても、すべてが混ぜあわされた。遅れた地域を全力で援助しないより進んだ地域の罪は、極貧のうち捨てられた人々を顧みない、裕福で教養ある南部人のそれに等しい。そして、その行きつく先も同じである。アグロロマーノで死に瀕した農民、村で飢えに苦しむ農民、そして、ナポリのあばら屋で糊口をしのぐ貧民は、今日では、我々にもあなた方にもこのように言えるのだ。「イタリアの統一と解放がなかったからには、あなた方にもう逃げ道はない。あなた方が我々を開化させられないなら、我々によってあなた方が野蛮と化すだろう。」そして、我々南部人は、北部・中部の人々にこう言う権利がある。「あなた方の無関心も、我々のそれと同じように不道徳で罪深いのだ」と。

## 〔解説〕

上記は、パスクアーレ・ヴィツラリ (Pasquale Villari, 1826-1917) の「南部からの手紙」(Lettere meridionali) の一部である。ここでのテキストには、18世紀から1970年代に至るまでのイタリア南部に関する代表的な論説を集めたアンソロジー、R. Villari, *Il Sud nella storia d'Italia*, Bari, Laterza, 1988 (3ed), pp.96-103. を用いた (中略部分はテキストによる)。

「南部からの手紙」は、統一後のイタリアで、南北の経済的・社会的発展の格差を南部の立場から初めて告発した作品として知られている。最初は1861年にミラノの新聞『ラ・ペルセヴェランツァ』(La Perseveranza) に、その後、1875年にはトリノの『オピニオーネ』(L'Opinione) 紙に発表され、後に他の論説も併せて一冊にまとめられた (Le lettere meridionali ed altri scritti sulla questione sociale in Italia, Firenze, 1878)。

ヴィツラリはナポリに生まれたが、1848年に憲法制定を要求する革命運動に参加したあとはフィレンツェに亡命し、歴史家、教育者としても多くの業績を残している。南部問題に表われている彼の基本的立場は、1861年の段階では、「進んだ北部が遅れた南部を開化しなければならない」とする「温情主義的開明主義」であったが、1875年以降は、ここに訳出した部分にも現れているように、南部問題を政策課題としての社会問題の一環としてとらえ、その解決によってパリ・コミューンのような革命的混乱を防止しようとする「政治的保守主義と結びついた社会的改良主義」と言えるであろう (竹内啓一『地域問題の形成と展開－南イタリ

ア研究－』大明堂，1998年，37, 96頁）。

ヴィッラリにかんする日本語の論考には，以下のものがある。

小田原琳「バスクアーレ・ヴィッラリと『社会問題』」『言語・地域文化研究』（東京外国語大学大学院博士後期課程論叢）第7号，2001年3月

小田原琳「バスクアーレ・ヴィッラリに見る『南部問題』の誕生－『南部書簡』と『歴史的方法』の分析を通じて－」『言語・地域文化研究』第9号，2003年3月

なお，上記に訳出した部分には，小田原氏の論文に引用された箇所も含まれている。その箇所については大いに氏の訳を参考にさせていただいた。

（かつた ゆみ 本学助教授）